

I. 位置とアクセス

久米島は、那覇市から西方約 90 キロの東シナ海に浮かぶ、面積 58.8 平方キロの小さな島である。日本の「本土」からみれば沖縄本島それ自体が「離島」であろうが、その沖縄本島からみても、久米島はさらに「離島」である。しかし空路では那覇から片道 9,700 円、時間にして 30 分の行程で、宮古島 (14,500 円、45 分) や石垣島 (19,000 円、1 時間) に比べれば割安である。あるいは高速艇でも、那覇泊港から 1 時間 45 分を要するが 3,010 円で渡れるので、手軽に離島気分を味わえる観光地といえよう。

II. 自然環境

久米島は上記のように那覇から近いのが取り柄であるが、面積は、本島以外では先島諸島の西表島 (289.3 平方キロ)、石垣島 (222.5 平方キロ)、宮古島 (158.7 平方キロ) に次ぐとはいえ、大きな差がある。久米島の主な観光ポイントを一周するだけなら、レンタカーで 1 日あれば十分である。自然も「雄大な」というほどのスケールではなく、あくまで手頃な、そこそこの、といったイメージが一般的な受けとめられ方であろう。

島全体が第三紀の火山帯に属し、輝石安山岩の山地が島の南北軸をなしている。最高点は北部の宇江城 (うえぐすく) 岳 310 メートル、これに次いで南部の阿良 (あーら) 岳が 287 メートルである。宇江城岳の南斜面は緩やかに盆地状に窪んでいるため、比較的容易に河川水を貯留できる。このような地形条件が島民の生活と産業を支えてきたとあってよい。地図で見ても、白瀬一号ダム・白瀬二号ダム・上江洲 (うえず) ダムをはじめ多くの貯水池が山腹ないし山麓に配されている。山地の東西両側には平地が広がっており、北部の海岸では隆起珊瑚礁が段丘状に発達している。島の西端に 1965 年に開設された空港は、沿岸に数キロにわたって連なる堡礁の一部を埋め立てたものであり、逆に島の東方の沖合いには延長 11 キロにも及ぶ御願干瀬 (うがんびし) が続き、わずかに海上に顔を出す陸地は「はての浜」と呼ばれている。土壌は山地部では安山岩土壌、平地部では沖積土壌および珊瑚石灰岩土壌となる。

III. 集落と産業

久米島は行政的には島尻郡に属し、東半の仲里村 (面積 37.7 平方キロ、2000 年 7 月現在の人口 5,220 人) と西半の具志川村 (面積 21.1 平方キロ、2000 年 12 月現在の人口 4,458 人) の 2 村からなる。首里王府時代においても、中城間切 (なかぐすくまぎり、1667 年に改称して仲里間切) と具志川間切の 2 間切制であった。1879 年の廃藩置県によって久米島番所が具志川間切東部の大田村在番詰所に置かれたが、まもなく仲里間切の真謝村に移転、翌年には久米島役所と改名して儀間村に新築された。

[仲里村] 仲里村の主要な生活空間は東部の平野に広がる比嘉・謝名堂 (じゃなどう) ・宇根・真謝などの一帯と、西の具志川村境に接する儀間、さらに北部の台地上の下阿嘉・上阿嘉・比屋定・宇江城などの地域に大きく三分されよう。現在の村役場がある比嘉や隣

接する謝名堂は、沿岸砂州の微高地上に発達した列状の集落である。周囲の低平な海岸平野は標高 1~2 メートルにすぎず、現在では一面にサトウキビ畑ないし野菜畑が広がっている。一般には古い集落のマキヨは高台にあり、農業の発達とともに低地へ移動してきたと伝えられる。付近では一時期はパイナップルの栽培もさかんで、真我里の海岸寄りにパイナップル工場も設置されたが、国際競争に勝てず 1982 年に閉鎖、ホテルに変わった。海岸はイーブ（伊保）ビーチと呼ばれ、1980 年にはリゾートホテルがオープンし、島で最大の海水浴場となったほか、運動公園として体育館やプールも整備された。約 1 キロ北方の真謝は間切蔵元（役所）跡が残るかつての中心集落で、久米島紬の最大の産地でもある。真謝に隣接する宇根の東の真泊には漁港と久米島漁協があり、奥武島との間の浅瀬には 1983 年に海中道路が架けられた。

儀間は 1998 年現在 369 戸 940 人を数える大集落で、具志川村嘉手苅（かでかる）の集落と連続している。歴史的にみても、嘉手苅はかつて仲里間切に属しており、1744 年に具志川間切に編入された。村境に近い儀間は空間的にも島のほぼ中央に位置する。1960 年に集落の東端に久米島製糖の工場が開設され、1976 年に久米島農協（現 J A）が置かれたのも、このような利便性によるものかと思われる。仲里村では北部の台地地区でも、平坦面はほとんどが畑地に開墾されているが、宇江城岳の北麓では豊富な湧水を利用して、仲里酒造が泡盛「久米島の久米仙」を製造し、島の特産物として全国的に流通している。

〔具志川村〕 具志川村の生活空間は、脊梁山地の山麓一帯から海岸にかけて比較的連続性を有しているが、あえて三分すれば、山麓部の台地上に塊村となって連なる仲村渠（なかんだかり、渠は灌漑用水路）・具志川・仲地・山里・上江洲（うえず）などの諸集落、海岸沿いに列状村をなす鳥島・仲泊・兼城（かねぐすく）・嘉手苅、そして西部の明治以後の士族授産による開拓村（カイクン）である北原や大原などに、特徴の違いを見ることができ。台地の南端に近い西銘には、海を見下ろすかのように、かつて具志川間切を支配した代々の地頭である上江洲家の住宅が立っている。また南部海岸の仲泊に隣接する鳥島は、1903 年に大噴火した硫黄島からの移住集落である。

島の東西の二分点としては、仲里村と具志川村との行政界よりも、兼城と嘉手苅の間の白瀬川河口がエスチュアリー状に食い込み、地形的に大きな断絶を示している。兼城港周辺は白瀬川から流れこむ淡水によって珊瑚礁が発達せず、中国との交易船が寄港したり台風時の漁船の避難港として、島内随一のウフンナトウ（大港）であった。現在でも兼城の西にあたる仲泊にはフェリー埠頭があり、1,000 トン級の船が横着けできる。この一帯は、空間的にも機能的にも島の玄関口にあたっていたのである。

このように仲里村と具志川村は、島の機能をたくみに分担しながら共存してきたといえよう。日本への「復帰」半年後の 1972 年 11 月には早くも両村合併協議会が発足したが、その後の調整が遅延し、ようやく 2002 年 4 月に合併の運びとなるそうである。

〔産業構成〕 1995 年の産業別就業者数から見れば、仲里村では総数 2,253 人のうち農業が 613 人、クルマエビ養殖なども含めた水産業が 96 人である。具志川村では総数 2,050 人のうち農業が 664 人、水産業が 42 人である。両村の合計では農業就業者率が 28.7% を占めることになる。これは「離島」に共通することとはいえ、沖縄県平均の 6.7% に比べればはるかに高率である。耕地面積では、1971 年に両村計で総数 1,583 ヘクタールのうち田が 298 ヘクタール（18.8%）、普通畑が 1,150 ヘクタール（72.6%）であったのが、1999

年には総数 1,745 ヘクタールのうち、田はわずか 2 ヘクタールにすぎず、代わりに普通畑が 1,605 ヘクタール (92.0%) を占めるにいたった。仲里村では普通畑のうち約 7 割が、具志川村でも約 6 割がサトウキビ畑である。

農産物粗生産額の上位 5 品目を見れば、仲里村では総額 1,359 (単位百万円) のうち、「さとうきび」948 (69.8%)、「肉用牛」172 (12.7%)、「きく」83 (6.1%)、「さやいんげん」43 (3.2%) にがうり 31 (2.3%) と続く。具志川村では総額 1,213 (単位百万円) のうち「さとうきび」507 (41.8%)、「きく」167 (13.8%)、「葉たばこ」145 (12.0%)、「さといも」110 (9.1%)、「肉用牛」103 (8.5%) である。島の経済にとって、観光収入以外では相変わらずサトウキビ栽培が重要である。しかしこれは国の買い取り価格維持政策の庇護下に置かれているとあってよく、国際市場価格とは数倍の開きがあるのが実状である。

IV. 観光資源の分布

[自然関係] 観光資源は、自然・歴史・民俗などの諸側面からとらえる必要がある。まず自然関係では、県指定天然記念物として、①具志川村久間地の「五枝の松」、②仲里村宇根の「大ソテツ」、③仲里村真謝の「チュラフクギ」、④仲里村奥武島の「畳石」が挙げられる。①は根元から大きく枝分かれしたリュウキュウマツ、②は樹高が 6 メートルと 4 メートルに及ぶソテツ、③は集落内の美しく整備されたフクギの防風林である。いずれも見事なものであるが、単独では観光資源として集客力が弱いと言わざるをえない。ただし「五枝の松」周辺は公園として整備され、駐車場・トイレ・売店が備わっているので、周回コースに組み込んだ場合には有力な下車地点となろう。

自然環境の項でも述べたように、久米島の自然の魅力はなんといっても海岸美にある。上記④の「畳石」は、安山岩質の溶岩が冷えて固まるときに五角形や六角形にひび割れたもので、現地で見てもおもしろく、散歩・水遊びコースとして最適である。つまり一目見て 5 分で帰るような「見学地点＝スポット」ではなく、30 分や 1 時間はそこで過ごしてしまう「滞在場所＝エリア」である。このようなエリアは、友人どうしなどでレンタカーを借りて気ままに回りたい若年層や家族連れには人気があると思われる。島内随一の海水浴場であるイーフビーチのリゾートホテル地区からは約 2 キロ離れているが、レンタサイクルなどがあれば十分であろう。また、東方海上の御願干瀬と「はての浜」の全貌は、真謝北方の「黒石ムイ (森)」頂上 (標高 132 メートル) から遠望できるが、チャーター船も用意されており、プライベートな無人島気分が味わえる。

[史跡・文化財関係] 県指定史跡としては、⑤具志川村仲村渠の「具志川城跡」、⑥具志川村嘉手苧の「伊敷索 (いしきなわ) 城跡」、⑦仲里村宇江城の「宇江城城跡」、⑧仲里村真謝の「仲里間切蔵元跡」、⑨具志川村大原の「久米島大原貝塚」、⑩仲里村比屋定の「ウティダ石」がある。グスク遺構としては、⑤が海に突き出したロケーションで見晴らしもよく、島内一周道路からの立ち寄り客も見込めそうである。⑥は地形的に目立った特徴はないが、周辺のながらかな丘陵地は散策コースとしては快適で、2000 年には付近に「久米島自然文化センター」がオープンした。⑦は島の最高峰の山頂にあり、展望台としても絶好のロケーションにあるが、自衛隊の通信基地への取り付け道路以外はアクセスが良くない。⑧は王府時代の役所跡で、身近に歴史を感じさせる存在としては有力な観光資源となりうる。建物はすでにないが、残された石垣が国指定重要文化財 (建造物) であり、正面

入口を中心にきれいな半円形を描く造形美は、それだけでも一見に値する。どんな建物が立っていたのかが想像できるような説明・展示があれば、さらにイメージはふくらむであろう。⑨は石碑によってその位置が示される程度で、単独では集客力は弱いといわざるをえない。⑩は比屋定集落東方の松林の中にあり、数本の線が刻まれた珍しい石で、今から500年前に太陽の動きを観測したと伝えられる。一周道路からも比較的近いので、歴史の「謎」を楽しみたい観光客には、北部海岸での見学スポットになろう。

史跡ではないが、⑧と同じく国指定重要文化財（建造物）として、⑪具志川村上江洲の「上江洲家住宅」がある。上江洲家は⑤の旧具志川城主の末裔といわれ、「親雲上」を称し代々具志川間切の地頭代を勤めた旧家である。当家所蔵文書によって主屋の建築が1754年であることが判明したが、これは現存で確認できる沖縄最古の住宅である。1993～4年にかけて半解体修理が行われ、管理も行き届いている。もっと注目されてもよい見学スポットであろう。

県指定有形文化財（建造物）としては、⑫仲里村真謝の「天后宮」がある。天后宮とは中国で海上安全の神である天妃を祀るもので、1756年に中国の冊封使一行が琉球の尚穆（しょうぼく）王を認定するために那覇に向かう途中で台風に遭い、真謝港で島民に助けられた際に、持っていた天妃像を祀ったと伝えられる。しかし菩薩堂とも呼ばれる堂宇は小さく、現地でも目立ちにくい。琉球と中国との国交や、那覇・長崎ほかアジア各地に分布する天后宮に関する説明・展示などがあれば、東アジアネットワークにおける久米島の位置が分かって、興味も深まるであろう。また県指定有形文化財（絵画）として、仲里村宇根の喜久村家に伝わる⑬「絹本着色花鳥図孫億筆」がある。孫億は中国の福州で活躍した画家で、上記の冊封使が感謝のしるしに贈ったものである。その後琉球の絵師たちが中国に渡って孫億の画法を学び、琉球画壇を形成したという点で、文化史上も貴重な資料であるが、おそらく観光客にはあまり認識されていないと思われる。さらに県指定有形文化財（工芸品）では、具志川村山里に伝わる⑭「黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃及び緑塗鳳凰雲沈金丸内櫃（一連二合）」も16世紀初頭の沈金作品として貴重であるが、これも島外にはあまり知られていないのが現状であろう。

島の伝統工芸としてもっとも有名なのが県指定無形文化財（工芸技術）の⑮「久米島紬」である。地元の祠には、県教委の調査によれば原形をとどめないほどに劣化した衣裳が保存されており、かつて中国船を修理して皇帝から褒美をもらった堂之大比屋が、養蚕の技術を持ち帰ったという逸話に因むものとされている。しかし「由来記」によれば、1619年に越前の阪元宗味が王府の命で久米島に派遣され、養蚕や繭の引き方を指導し、1632年には薩摩の友寄景友が来島して八丈島織を教え、紬の織り方や染め方を指導したと伝えられる。17世紀中頃にはすでに御用布（グイフ）として地租の代納物に指定され、王府の厳しい監督によって、技術・品質はより向上した。特産品としての出荷量のピークは大正頃にあったようであるが、現在でも仲里村比嘉の「久米島伝統工芸センター」（久米紬事業共同組合）では、久米島紬の製作工程を公開実演しており、若い女性客にも人気がある。

【宿泊施設】久米島ホームページによれば島内にはリゾートホテル3、観光ホテル5、民宿15、計23の宿泊施設あり、それらは大きく2カ所にまとまっている。1つは島のほぼ中央南海岸にあたり、フェリーの発着点にも近い具志川村仲泊および兼城周辺であり、もう1カ所は島の東海岸のイーブビーチに近い仲里村謝名堂および真泊周辺である。ただ1

つ例外といえるのが、西海岸の空港に近い具志川村大原の「サンリーフリゾート久米島」(客室数 87) である。イーフビーチには他の 2 つのリゾートホテルすなわち「ホテル日航久米アイランド」(同 125) と「全日空ホテルズイーフビーチホテル」(同 80) があり、ビーチ中心のリゾートホテルとなっている。それに対して、仲泊周辺にはやや古いスタイルの「観光ホテル」が多い。民宿はそれぞれのホテル群の周辺に分布している。

V. 観光客の動向

上述のように、久米島の観光資源は、島の規模の割には自然・文化両面にわたって多種多様であり、地域的にも片寄らずにバランスよく分布しているといえる。これはもちろん、久米島という地域が長い歴史の中で熟成されてきたことの結果であるが、大自然の中でゆったりと時間を過ごしたい訪問者にも、固有の歴史や文化を探りたい訪問者にも、かなりの満足感を与えることができるのではないかと思われる。しかし、統計から観光客の動向を見れば、まだまだこの島のポテンシャルが最大限に生かされているようには思えない。

1998 年に県が行った観光客アンケート調査(有効回答数 11,134) では、行先別の訪問者数とその割合(重複回答あり) が示されている。行先区分は、国頭、本部、名護、恩納、金武・宜野座、中部、那覇、南部、伊平屋・伊是名、伊江島、久米島、慶良間、宮古島、石垣島、西表島、与那国島の 16 地区である。このうち上位を占めるのは当然ながら那覇 7,403 人(66.5%) や大型リゾートホテルが立ち並ぶ恩納 4,740 人(42.6%) であるが、「離島」でも先島諸島は集客率が高い。石垣島 1,199 人(10.8%)、宮古島 1,009 人(9.1%)、西表島 775 人(7.0%) などである。それに対し、本島に近接した「離島」は集客率がきわめて低い。慶良間 349 人(3.1%)、久米島 177 人(1.6%)、伊江島 163 人(1.5%)、伊平屋・伊是名 65 人(0.6%) などである。

この差は宿泊施設稼働率(宿泊者数÷収容人数×100) にも反映されている。1998 年で見えた場合、久米島では多客期のピークである 8 月でも 73.8(全県平均 86.5) であるが、閑散期の 1 月では 8.6(全県平均 55.0)、12 月は 9.2(全県平均 48.3) と、いわばガラ空き状態となる。これは同じ「離島」でありながら八重山(石垣・西表) の 1 月が 67.7、12 月が 51.1 と、いずれも全県平均を上回っているのとは対照的である。

観光資源の充実度から見て、先島諸島に比べてもそれほど遜色がないように思われる久米島が、なぜ「実力」の割に「人気」が低いのか。ひとつには、「本土」側の客のあまりにステレオタイプ化された沖縄イメージと、さいはて指向があるように思われる。これらの客の多くは、なるべく「本土＝日常」とはかけ離れた自然や生活を体験することによって、彼らのエキゾチシズムや非日常感を満足させようとする。そのような客にとって、おそらく久米島は中途半端である。沖縄本島の夏の混雑を避けたいだけなら、もっと近い慶良間諸島でも十分であり、逆に那覇の国際通りはもう飽きたというリピーターにとっては、石垣島やさらに船で竹富島という「秘境」も、魅力あるコースとなろう。沖縄県を訪れる観光客の 57.5% は 2 泊 3 日であり、20.7% は 3 泊 4 日である。東京や大阪から石垣島に直行する客は、その周辺だけで 2~3 泊のコースが組めるが、久米島単独で 3 日はやや持て余し気味となる。さりとして沖縄本島コースに久米島往復の 1 泊をアド・オンすると、乗り継ぎの割高感が残る。

このような「本土」人の「沖縄観」を打破するには、やはりイメージ戦略的な PR 活動

が最優先課題となろう。自然景観においても、東部海岸の「豊石」や「はての浜」は十分に「非・本土的」と思われるが、「本土」でそのようなポスターや映像を目にすることはほとんどない。意外と知られていないのである。石垣島は、もちろん航空会社のPR戦略としてではあるが、トライアスロンの開催によって何時間もテレビ中継され、すっかり若年層の間で定着した。久米島ではそのような全国規模のイベントも少ない。

久米島は空港のある西部が入口であり、上江州家住宅などが残る中部が歴史と文化の中心、そして東部がダイナミックな海岸美という役割分担がおのずとできているように思われる。受け入れ施設としては、イーフビーチの航空会社系リゾートホテルが建築後すでに20年以上を経ているので、つねに海外の最新リゾートホテルと同列に比較する若年層にとっては、しだいに魅力が薄れていく可能性もある。乗り継ぎの割高感を「包括運賃割引」によってカバーするとすれば、航空会社系ホテルやそれに提携する形での誘致策が有力となろう。

しかしピーク期への対応もさることながら、むしろ秋～冬季の落ち込みを改善するためには、この時期に沖縄本島を訪れる予定の中・高年層に「もう1泊を久米島で」と呼びかけることも有効ではないかと思われる。「上江洲家住宅」や「久米島紬」など、もっと固有の歴史や文化をアピールすれば、相対的に所得の高い中・高年層なら割高感は薄れるのではないだろうか。その意味でも2000年5月の「久米島自然文化センター」のオープンは時宜を得たものであり、さらに2002年4月に控えた仲里・具志川両村の合併も、より「久米」の名を一本化する方向ではプラスに作用するものと期待される。

統計および資料

- ・沖縄県教育委員会編『沖縄の染織』(I) 染織品編、1998年。
- ・沖縄県教育委員会編『沖縄の文化財』I～IV、1996～1998年。
- ・沖縄県商工労働部観光リゾート局『観光要覧 平成10年版』、1999年。
- ・沖縄県農林水産部園芸振興課『沖縄県の園芸・流通』、2000年。
- ・沖縄県立博物館編『城(グスク) 一城に語らせた地域歴史一』、1992年。
- ・『角川日本地名大辞典』47 沖縄県、角川書店、1986年。
- ・久米島自然文化センターだより、1、2001年。
- ・『JTB時刻表』、JTB、2001年3月号。
- ・沖縄県庁農業関係統計ホームページ。
- ・具志川村ホームページ。
- ・久米島観光協会ホームページ。
- ・仲里村ホームページ。

(文学部 教授)

1:90,000 0 1 2 3cm

